

5

日常的にできる支援＝関わり方の留意点

具体的な対応については、状況に応じて考えて行く必要はあると思いますが、すべての対応の基本になってくる所は「関わり方」つまりは「こちらの意識」が大切になってきます。支援の例に記述した部分に重なる部分も多いですが、日常的に出来る支援としての「関わり方の留意点」についてまとめます。

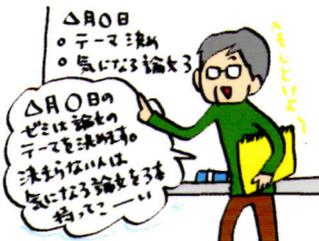
その1：指示ははっきり明確に出すこと

発達障害を持つ学生に共通している苦手さは「指示をうまく聞けない」というところだと思います。一生懸命聞いても「文脈理解の苦手さ」・「聴覚的処理の苦手さ」・「曖昧な言葉のイメージの相違」などから叱責される経験につながりやすいと思います。本人の努力はもちろん必要ですが、関わる側が「伝わりやすい伝え方」をする意識を持って関わることも重要な支援になってきます。伝える際には、○具体的に伝える、○できれば視覚情報も付加して伝える、○期限などははっきりと示す、○ノートやメモにきちんと書くように指示を出す、○最後に確認をとるなどの配慮があれば伝わりやすさは上がると思います。



曖昧な指示になると、「テーマを決めるのはどの程度まで決めるのか?」、「次発表というが次はいつなんだろう?」という不安が出てきて、結局は何も手につかない状況になりやすいと思います。不安が高い子は発表するだけできついので、なんだかんだ理由をつけて回避しようとするかもしれません。

できればこう伝えていただければと思います。



- 板書して書く（メモを取りやすくなります）
- 期日をはっきり示す（予定を考えやすくなります）
- メモを取るように指示をした方がいいです
- 決めきれない人はこうして欲しいという代替方法を提示することで「回避」を止めやすいです
- 去年の例などを挙げるともっといいと思います

おまけに・・・



どうしても不安になったりする学生や一度ではなかなか理解ができない学生のために、もう一度話をする機会を設定して、伝えてあげてください。

「迷惑をかけたら」とか「緊張して」という学生はよく見かけますので、自発性を期待するよりは指示をして話を聞いてあげてください。

その2：制止・禁止ではなく肯定的な言葉を使おう

私たちはどうしても「～はだめ」、「～するな」という禁止や制止の言葉を使うことが多いです。この伝え方は、「正しいやり方を知っている」人にとっては十分意味を持つことですが、「正しいやり方を知らない」人は「どうしたらいいか分からない」という不安や混乱を与えることになります。発達障害を持つ学生との話の中で「どうしたらいいか分からない」という相談は非常に多いので、できるだけ「～してほしい」・「～をして」という具体的にしてほしいことを伝える言い方をしていただければと思います。



「だめ」・「こら」・「違う違う」などの否定的言葉に弱い学生は多いと思います。最近の学生は打たれ弱いと嘆いても始まらないので、「きちんとできる学生」を育てるためにも「正しいこと」を伝えていきたいものです。発達障害を持つ学生は一度きつくなされただけで「トラウマ」になりやすいです。

できればこう伝えていただければと思います。



- 「だめ」ではなく「こうして欲しい」を伝える
- できれば視覚的に伝える（手順書の存在）
- 先走ってやろうとする学生には「よく聞いてよ」という注意を引く声掛けで動きを止める
- 事前にやるべきことを伝えておけば、「約束したことを守れなかった」ことを叱責しやすくなります



確認が多い学生は、「不安が非常に高い」状態だと思えます。同じことであっても何度も聞いて確認をしないと不安になってしまう学生には、どうしても「またか」とか「面倒くさいなあ」と思いがちです。そういう時に制止（今は無理だよ等）をすると余計に不安が高くなって確認が増える可能性を高めます。

できればこう伝えていただければと思います。



- 今がダメな理由を伝える（これをしておかないと「嫌われている」と勝手な思い込みが作られます）
- 「何時ならいいか」という見通しを提示する（衝動性や不安は「制止」をされると高くなる傾向がありますので、対応の基本は「何時ならいい」という「見通し」をしっかり伝えていくことです）

その3：世間話をしっかりしよう

コミュニケーションに苦手さを抱えている学生の多くは「人との会話」の機会が少なくなってしまいがちです。コミュニケーション能力は会話をすることでしか伸ばしていきませんので、なるべく世間話をする機会を作ってあげて下さい。難しい話ばかりだと自信がない学生は先生と話すこと自体が苦痛になったり、不安なことになったりします。



関わる側としては、「指導している」ことであっても、受け取る本人にとっては叱責に感じたりすることはあると思います。また、研究や勉強に自信を無くしていたりすると、そういう話をするだけで「責められるかも・・・」と不安になったりすることもあるようです。必要な会話だけになると説教や指導が多くなりがちだと思います。

できればこう関わっていただければと思います。



- 研究の話だけでなく、世間話のネタを提供する（先生が好きなものを伝えるだけで、話をするためのネタができます）
- 表現下手な学生には「君は何が好き？」というオープン・クエスチョンよりも「君は△は好きか？」という「はい・いいえ」で返答できるクローズド・クエスチョンの方が有効です

もっとできればこう関わっていただければと思います。



人間関係を作る上で一番のコツは「趣味を共有すること」だと思います。会話の中で共通の趣味を探する方法と本人が好きなものにこちらが興味を持つ方法があります。世界を広げると思って合わせてみるのもいいかもしれません。関係ができれば、「指示をよく聞く」ようになりますので、楽になるかも？！です。

その4：連携をしっかりとろう

連携の重要性は言うまでもないことですが、なかなか「いい連携」を作るのは難しいものです。相談などは個別にしていますが、学生にとって一番大事な存在は「指導教官」なのは間違いありません。私たちは「指導教官と発達障害を持つ学生」の関係づくりをお手伝いしたり、「2人の問題解決」のお手伝いをするのが仕事になります。

「学生が社会参加できるように」という目的で連携をしていくことが重要になりますので、お互いに「ダンピング（放り投げ）」や「個人攻撃の罠」にはまらないようにしながら一緒に検討していければと思います。



「リスク管理」の必要性はあると思いますが、対人関係に絡む問題については「大人の都合」でリスク管理をしてしまうと余計にトラブルは大きくなる気がします。

「学生の為に」連携出来れば良いですね。

ではなく・・・



- 研究室まで出張して話を聞きます
- メール等で相談を随時受け付けるようにしていきます
- 学生に確認の上ですが、「学生の困り感」の説明や「できる支援」について一緒に話し合う機会が取れたらいいと思います。

その5：学生をしっかり信じてあげましょう

発達障害を持つ学生の多くは、たくさんの失敗経験を積み上げていると思いますし、将来に対する漠然とした不安を持っていると思います。頑張るのは本人にしかできませんので、私たちにできるのは、「頑張る事のお手伝い」だけです。お手伝いの中でも一番重要なことは、「学生に期待をしてあげる事」だと思います。ピグマリオン効果でも示されるように「期待をするだけで人間は成長する」ものですので、「いつかできる」ということと「社会に出て笑顔で過ごす学生の姿」はイメージしてあげてください。

【ピグマリオン効果とは？】



能力の伸びを図るテストをします



先生に「能力の伸び予測」を返します



「伸びる」という結果を受けた子は伸びました

この実験により、「能力の伸び」を図るテストは非常に有効であることが示された…。ではなく、「期待するだけで能力は伸びる」こと（ピグマリオン効果）が示されました。なぜなら、「テスト」も「テストの結果」も全く適当にしたものだからです。